

サバ州における森林利用の変遷と現況

—特にキナバル公園と Darmakot Forest Reserve 周辺地域の比較—
北山兼弘（京大・生態研センター）・Mulyanto Darmawan（東大・林学）

サバ州の特徴は、ボルネオの中でも標高による起伏が大きいことがあげられる。原生林タイプや森林の利用形態は標高に大きく依存していると思われる。この研究では、サバ州の中でも特に高標高のキナバル公園周辺と、それに続く低標高で比較的なだらかな Darmakot Forest Reserve 周辺地域の森林利用の変遷と現状を明らかにする。両地域を仮想的なトランセクトで結び、地形や標高に依存する森林利用の形態とその変遷を明らかにすることが目的である。対象地は、1970年代から急激に土地利用が進んだので、衛星データを用いてこれ以降の時期についての森林利用の変遷を集中的に解析する。

LANDSAT 衛星データを検索した結果、比較的雲の影響の少ない 1973MSS、1985TM、1991TM、2000ETM の4年代のデータを入手した。キナバル公園周辺地域については、基本的に USGS の土地利用区分 Level 1 のカテゴリーに従い、教師付き分類を行った。USGS Level 1 の凡例は、森林、農地、草原・放牧地、水域、都市域、裸地であるが、この他にサバの景観において、特異的かつ広域を占める、耕作放棄地低木林・疎林・二次林のカテゴリーを加えた。

また、サバ州の全域において森林分布の広域把握を行うために、1991-92年に撮られた MOS 衛星データを基にして判読作業を行った。凡例は、基本的に上記を用いたが、択伐林を原生林から分けるために、伐採搬出路（スキッド）の有無を手がかりにして択伐林の分布も図化した。1991-92年の森林利用状況を以下に示す。

